かう寿志保里

へ 4
4509

早稲田大學圖書

千寿こ保里

氷室の杜もおなしきふもとに此の處にて見いてたる
蔭こほりは一とせ中京よめ都ちかき所や所ちかなる人能
書は世にきこえて書家と詠は人のうちを老の花のまことら
むなかくにたる能名もいと涼しき有りし遣青なり涼あるかの
高志常越路の守しも今も世にたえぬよしいふ文化の十
とせ阿すり禾穂の春日の花の友とも白川深花のもとに
て斎もむすひきられさるかひとつし山しるて世をもちまて試
こむもてよみつし係て人のほ之あら所のきた家所の継
めしつとも阿るし詠をも添てぬかきり殊ふりそそてや
とひ来て師の見の室とていかゝ路の阿のほとりにうつ
住らひ之折々なる春日雷の花の都の松を見えて月の
三の題をしも三十まり三はかりむすひしうて遠は涼しき
いましおもつ春ひとも越路なりさまむ春の秋の友おもむ

昭和九年十月二日 購求

へ4 4509
門 へ 4
號 4509
登

やえ梓にほりて世に散らふ愚かなるのみなしぬかのうら
田は藻屑とまた拾ひなむみきえて見付けて正ろめ
さし詞のむのともたうなれなきてえきあはぬしらは捨しん
まは誠なる友ありきにありて世にも結ぬもとむかむひな
りゆきはちる草のふの香はてら絶し水草を水の末えてせ
てあそ都らの人ともまたなりきかゝみのちゝのそこ見
えさとえ筆を波めのむを後の世さまに志月しみたる鑒
りまゆひおし絶えさなりきらし

天保の三とせみな月のはしめの日

禅尼　雪月しるす

一番　千鳥

左勝　常清

夕しほや沖のしらすは波ならん千鳥鳴くなり川あそ吹越して

右　挙直

ゆふかけて小山お経ける
おきし鳴くなり川
た千鳥のしるすよ鴨の河原にちかく鳴きて
たえしお流すまし大島おろしたるゝ
鳴るそ沖とほは絶えゆくきたなしはる
るゝ心すましけなるこ知して
らんされは
夕しほの満ちるまゝはなきゆくらん沖になく鳴や
まいよりなるらん

二番　左勝　久敬
鴨の大福ひろくみちてく
えさりかな
右　宝蒼
浦かとたゝみて千鳥のたちはたつ
こそ鳴る
かゝみてきちえを
ちこちの声するや
すゝくにとれく
二番
一鴨の大福

左　　　　　　　　　　　　　　　　成久
汐みちて吹上られて友ちとり吹上の浜を帰るなりけり
右 勝　　　　　　　　　　　　　　　久道
川波のよるへかれしいはやそこ友なしとなるらひてなく千鳥
吹上すくやしむかしの友ちとりとさへしその名の方
におもしろけれとは西国に行るこそのうたゝおもふ川は
みゆなるし行るよるへしれるひて如はまさりつきは
いとしくや行ら歟

四番
左 持　　　　　　　　　　　　　　　文秋
みなれ浦浅にかよふあすゝい鴨の紀のちとり也けり
右
河波に声高く浦よ交て田上河にちとり鳴なり

津守国助のよみをもとゝしきゝなるところありてれ田上
川にちとり吹なりとよめるあるはこのよひ行るすのて河
にわすなとも宮き波相とそきしてそ紀河の
清き流のとるをとはきくみとりてとも見ぬまゝりまた
行らん
みなとの浦姫れ波土にたく火まと河しのはれて
歌はおなしす

五番
左 勝　　　　　　　　　　　　　　　周慶
吹上の吹上の浜にまてこれはさきてさえてよるなくなり
右　　　　　　　　　　　　　　　　貴林
吹えよる鴨の河瀬の月影ともにひかしちとりなくなる
さえわたる川流の月みれまさる見なれるか歌すとか

なかれやさはこいまたみえしらさる
紀の海のやへの汐あひもまは月にのこる
以上のえま

六番

左　勝　　秀徹

枯らする千々れ濱の松風まつくさわたるをのはちり哉

右　　恵岳

松の名は世々宮跡の浦ちかよる雲さはりさくる
うきひく　あはれなる空うれしきのさやかなる川
きこゆ中行らん
枯るは千々れ色のなりせは松のみきをいりて
見ゆつき千世の声のこはめつらしきれ行きを調
みはまてきこゆるすくや

七番

左　勝　　天朗

面影の河原に清まて吹あらたまへる也

右　　彦章

折ほとに空きあはれ河原ひかりて高の呼ひさま
おとすなかりれ面影る雑さのこはいて吹きさ
行るつき夜をさめぬ秋のき枕のこころ吹てかし行
きはいり川きとつやてんなかれたのを
みきはかを吹田あまるはしらねとを折ほとよりは
あまれなりけ哉

八番

左　勝

鴨河のあはしを月をさえのこ枕にちかく面影吹ゆ　昌幸

右　　　　齢

かも河のわたりに住めばむかしきく鳴ぬよまれし [illegible]
おもへしかのすゝかきれまく　おのゝ方すしられて右
に左を嘆なれ侍りぬ　村ちかくとあるや今すこしかさは
おもはしうるに侍らん
鴨河の千鳥まれまれに人はかゝらぬに月になく声の
あはれなるよしけれ

九番

左　　　　元

浦まつの汐しらみえてむかふ千鳥ちよと鳴音は聞えけるかな

右　勝　　儀貞

浦毎にふきそよられて夜千鳥よる方なきに音をやなくらむ

左は浦まつの汐しらへつれとまさるにとて勝をえたり

とふへし　左は
塩の山さしての磯のむかしより千世はかはらぬ声そ聞る
みえけるは吹きくらべてよるかたはよる方
なやさらん侍らん

十番

左　勝　　夜鶴

沖つなみよする方しれ浦風の吹まゝ夕千鳥なくなり

右　　　　嘯月

大井河川岸さむき月にさそはれてむかし千鳥の
判のするはしれ左は浦のいと声しとや申侍らん右は
しく大井川なほうとふよもあしき見まほしけれ猶のことは
まよひ侍る
凡一世より新古今沖つなきに勝られ名残ある

り明の月ぞ遠くおのかむかしの知人ゆきは志へらし
おもそやおきゆりらん

十一番

左 勝

河おもて遠る霧よの明方れ月を読りてなくちりの部　　近

右

はりまるひくきの灘れ浪の上にたてまふするこゝ忘れられしき
川おくのさゆる霧夜まくおのゝ探覚すそ明方の月
君すしく行て
都までひくきのなみの浪のうへはみるけしきまそ
おもきまさりけ季

十二番　雪

左 勝

常清

みきはまで雲をも見えておくの霧すし山ぞ降れるしら雪

右　　雪月

白妙に雪のつもれる峯きみは今くるへき物なりきり
秋葉れのちおき川雪まとゝりむふこおし行季
かくいつる花をまつるみる雪をなとも月まるんなら
へさはらん

十三番

左 勝

朝夕あくて思ひなみけす見る雪は春のなくしめつらしき哉　　久敬

右

降つもる雪おもし深き山さとまくれし人めのくる名れ　　敬
はくはつひえ世をたく哀れ見て行末へつね
いつはそつし行らんされて遠く見近く見きりなめ行

判
雪やうき世ならぬめつらしく山里さへ行かう隔
白妙のあれあれめつらしおもしろ思ひよかるものなきは
かましくめては勝えんきこえ絶えらおもし勝と
する

十四番
左　　　　　　　　　　　　　範之
見んすれは山道のしは遠のぬかりは雪にうもれ行けり
右　勝　　　　　　　　　　　　直明
鳴よりれ峰吉さへ渡る大淵の汀の松を待る川津の郎
東は山はあまりになれは雪いまつ見ゆ引き大淵
の池の鳴よりさへかきらんきこゆしのはいまれの
雪ならは待りていよそ見すれん

十五番
左　勝　　　　　　　　　　　　文秋
難波山よはれこのしのきまて卯雪山ありし静原はさと
右
花は楢の花とみるゆきをいるわかなんとしの山里
卯雪ありり静原はさとはえつ雪ふれるさよの中山と
いふよさいりおもられすや行さん又こしの山さとそし
乏思ひやれるあられ行をし
むしきの都をちう紀志川の月の雪は秋城
のふ人

十六番
左　　　　　　　　　　　　　　周霞
誰しらぬ河それよみさらん思ふ玉のくは山に流るら雪

右勝　正言

しら雪のつもりてふしのねは雲より上に見えわたるらん
まじる峰の様に

神世より清き流は玉のちりなきは左川雲ゐて
たえわたるらんあらけてしまひ志くつるくわしく思ふは
此歌中のひろき夢つらふを右にまつるまは
猶うへとかけ高い歌のやうつ新路の末白まえ
ひとしからんまはまして

十七番

左　秀胤

大井河おちすう河よは花よのこ霰ふる雪のみをしつるまし哉

右勝　寅壽

しら雪は清く朝のかはさいなきれんもさのはしさりけり

河よし山の雪れもれ所らかしかりすやいおのれ月と
むらさらて春雪そしまめつるくせ河ちれもそさ
れんいとく君るしく侍りされとよし
わか門の柳の木はつりゆきやらん歌やらんと
待ぬとも行き若ろまはえれしきこのてやたくらき
侍らん

十八番

左勝　天朗

月むの卯のけなから白雪のゆきみ朝いめてしきれ

右

玉むこれ陀をわかれすかきかし柳ひろすあ如れしら雪
月むの卯のけも
かきくらしわかれぬ子れしら雪さ河のひかりかを

思ひとくらん

十九番

左 勝

うす雲の立わたりし山のはた見え初雪は見てそめかんり　廿番

右

はあけ初雪ふりし冬枯の庭なし深く生ふるたるれ

いはき初雪ゆきそめつもりすは侍るまと見えれ道

り山のそてつまは冬しきゆりて見て侍るまや

冬かきの庭よふりしも松ふし添し御日寒れと

ふ雨かれの庭

二十番

左 勝

はるれる比良の高嶺いうれ冬れ白雪も雪れ降　元

志まるらむ

右

庭の面にふりつもる白雪をとふ人あれなれはいとゞ

とふ人をいとゞまつ庭の雪より花はなき雪は花　萃章

その道のしきよしろ中半　侍従

廿一番

左 勝

白雪のつもる朝とくれるまでにとしをへぬはふるくなりて　狭衣

右　峯直

ともふよし折からひとつ見ず夜さ音なくつもる庭も雪

ことしを冬は寒さ成情かれうれ雨も作りようか

からうす松さ音もせず添まるらん心まよさ井て

ありてまさゆきれあはれ八

行し引のうれさこえわりぬまでふるしく雪み

早稻田大學圖書

右はまさりぬ

廿二番

左　　通

吹そふ松の嵐もうらまれて猶ふかき月をかくる白ゆき

右 勝　　貴林

行暮路はしら雪ふかき都にもみさる緑なりけり

青柳さみたれよりも思ひより緑かるまゝ

めつらしく緑おほかれ月てれるみやこをもよみれ

すきなかるねと

廿三番　　名所松

左 勝　　常清

墨江のなみをれ浦の小まつ原千歳の影のたゆるなかりけり

右　　敬

すゑはまたゐまつれ浦まわに千世のあまつひかれけるかな

住吉の松のさかえしれ志かの浦まつがえにたち旅世をひ

れる千年經ぬらんと詠みしは言葉を尽き都を

思ひやるらにもこらえ高つ経て千世の例と覚

れんは志賀なかりすまた青めし

千年をそりてもまれん小松はらそこよりの千世の秋

すあかねと

廿四番

左 勝　　成久

浦風の吹くるおとも高砂の尾上の松をかけりになり

右

朝ぼらけ立まよふ霧の絶まよりほのきこゆる鹿の声川

立まよふ霧はうらかれ行きてと思ひの物さびしき

うかれゆく行をまて尾上の松もさすらへ名るをきれち
め見てすやは
双ひては高きと見る陰も於しい何きかくゆは
かくつき

廿五番

左 勝　　　　　　　　　　　　文林
ひともとの松さし出てむかしより色をかへぬしこれ由松

右
朝つく日ほし出れ孫の子あれ松なれしうけたて所歟
此左のは松をなくしては見て侍らは
一もとの陰と立なるふまれつゝ那しほき後て
あはれさりけるを西うきたらん朝陰く日の影まて
いとをかしく侍らし

廿六番

左　　　　　　　　　　　　　周雪
すてられたるあよの古尾ありたれと松ハ昔の色をまさりけるかな

右 勝
夏引のいとよれ山の松の手のみとりハ深くそめくわる那
今世は古尾はまをもちしれするはうけ遣ときまこ歟
らぬの歌人のそれしらぬすゝむ側るは照そしこの里
なりらぬるハ事にけてしきのとまく中まるや
いそれかくふるき[illegible]しく涛あけつゝきやとしの
夏引のいと

廿七番

左 勝　　　　　　　　　　　　秀胤
秋[illegible]れ色つゝとめそふる雲路にし三保の松

萬世を済ける海はあせいてひとり栄るすゑの江の松　幸安

ゆく保ちいひ津守といひ岩きおそれ名家さへ作らす

世々かはらなきするかたなるひれなれや高砂の

神きしの姫まつ

廿八番

左　至朗

海なきれよるしらなみ高砂の松も老いなむ色やそふらん

右　恵岳

うちはへて波をあるかれ白雲の津守の海のはつれ雲家

としあまそふらん色はりとれのかに打ほんみさむ

きれしきさせいそけんしくられまくすかれるおさ

いそ侍る也

しら雲おつもりの松を叙ひてはいとく老きぬる色

の見え侍る

廿九番

左　大路

むら時雨ふるとも高砂の松を離るるひとの袖おもし　芳

右

浪風のうへ吹風のそよけしきをなれるかたてるきしの姫松

岸の姫まつ髪なれやわらいき高砂の松もつ赤ならん

すまめるは今は判者寄なりけるかつことそさま

とてやりと

村しられ分さけきは此お詠す書なかんとし

ひろの山の紅の

三十番

元
霧しきの庭ちるくや見ぬらんあとやの松の庭木むら崇
右勝　雪月
波よする白良はまの浦まちていとみちてそさかけりける
あこやれ書のこのよりさつき月れいそ思へぬとよあり
し讃さ意き佳景を思ひよせられけるいとおかしや
名表ひつそれまたみえ佐きと
夕やこは花きよしはやられ家しらくなのなり
存やうき候
三十一番
左勝　根谷
おもひの松をもかしれとらん鶴はこのみさひすけり
右　久定
武島はりの浦に於ける書かえは千鳥の友とやといへ川を明らん
おのえの松すさは世にしられたことわれし時え佐るへし
されとみれは左歌の詞すてあつしとは紛らし
或るはえの夜なる語やた川をのとけき
ことすて明らん為とおもはしのと時とり明さくや歌まし
し都へ去てあひ案てこそ詞さく歌の新体は々に
あれこそすゝはまされりとすへかるし
三十二番
左　道
むしはのみとりをそへてなそ名不栄をとする山の新浦まつ川
右勝　華童
万世をひとりつまれる老鶴の松を友なくたちまふつられき
[illegible]ひしらし中[illegible]

りきかれこれこの存する紀の松しるハまととにやとり
をそるなるへし謹

三十三番

左 持　　久敬

播磨なる記きれ灘のかしに浮きあやすみよ千鳥の声

右　西ヽ

みなれくの武隈あして珍らしきやく本の松を

むかしより名高き物れ俗すは先そひかれる俗よりれ出川
わまは見しれいとすまれ書る老細の二もす
ひとかくそいえとひと免俗しめ
今きれやの何ゆり俗の乃そしつかせる立まさるより音
やるこ後書をき人俗れはもとより俗にとまりは俗らん
ととと引ゆりぬふへし

　　　　　　　　　　　　　亜欄

まくは此巻歌合のほとりまくらの一歌を挙ぐ
作きをとりあつほうすこれりとやかへりんさるむ
すひ定きぬ哥のうつまは俗すは危ふみそれり
ぬる判者かとろの乃名をそれハ俗めあれうこ

文化十二年志もつき二写す